

平成 25 年度 第 1 回

国 語

〔注意事項〕

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷き、シャープペンシルおよび電算機付きの時計の使用を禁止します。
また鉛筆は、HB を使用して下さい。(持っていない場合は、ほかの濃さでもかまいませんが、濃く書くようにして下さい)
- 4 開始のチャイムが鳴るまで問題用紙を開かず、手を触れないで下さい。
- 5 考査中はよそ見をせず、きちんとした態度で行って下さい。
- 6 何か物を落としたら、黙って手をあげて下さい。
- 7 他の受験生に迷惑となるような行為をしないで下さい。

「次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。」

木原公園のニレの木に暮らすフクロウのルチアは、体調をくずし、ねぐらにこもっていた日から突然、「彼」の声が聞こえてくるようになった。

ある日、ふだん通りルチアに話しかけてきた「彼」は、いつもの他愛のないお喋りの後、ふと思いついたように、どうでもいいことをほんの話のついでに付け加えるように、こう言った。

「ねえ、ルチア。ぼく、やっぱり地球まで帰ることはできないらしいんだ」びっくりして声も出ないでいるルチアに、「彼」は早口に、ひと息で、「地球の周りの空気の層を通るとき、それとぼくの体との間の摩擦で、大変な高熱が生じるんだって。ぼくの体はそれに耐えることができないんだって。だからぼくは、地上に着く前に燃え尽きてしまうんだって」努めて平静を装っているけれど「彼」の声がかすかに震えているのに、ルチアは気づかないわけにはいかなかった。

「そんな……」

「ねえ……残念だねえ。きみと一緒に、ニレの木の枝に並んでとまって、『狩り』とか『野ネズミ』とかの話をしたかったねえ」

「そんな、ひどいじゃない！」

「仕方がないことなんだ」と「彼」は何でもないことのように言った。

「だって、ひどい……。こんなに長い月日をかけて帰ってきたのに、あとほんの、もう少しなのに……」

「ううん、いいんだ。仕方ないんだ。ぼくはお父さんたちから言いつかつた通りに、あの星の砂粒を取ってきた。ほんのちょびつとだけどね。でも、ちゃんと取ってきたんだ」そう言いながら、「彼」の声に誇らしげな力がみなぎった。「あんなに遠いところまで行ってねえ。そして、その後、体がこんなふうになっちゃって……でも、一生懸命帰ってきた。体は駄目になる一方だし、本当のことを言うと、もう目もあんまりよく見えないんだよ」

ルチアは何を言っているのかわからなかった。

「でも、ぼんやりとなら、まだ見える。やっと地球が見えて、それがだんだん大きくなってきたこの何か月かは、ああ、本当に嬉しかったなあ。六十億キロ……六十億キロだって！ ずいぶん飛んだねえ。往きはまだ元氣いっぱいだったし、飛ぶこと自体が楽しくてたまらなかったから、大したことでもないような気がしていたけれど、やっぱりあの小さな星は、ほんとに、ほんとに、とっても遠いところにあつたんだねえ」

「そうね」涙声になっているのに気づかれないように苦労しながら、ルチアは辛うじて言葉を押し出した。「あんたはえらい子ねえ。そんなに小さいのに、よくやり遂げて帰ってきたねえ」

「そうだろう」と「彼」は得意そうに、ルチアが「彼」と知り合ってから以来、初めて聞くような陽気な声で、ほとんど叫ぶように言った。「ねえ、そうだろう！ ぼくは凄（すご）いことをやった！ ハッハッハア！ 帰ってこられて本当に良かったなあ！」

「でも、あなたはここまでは、この地上までは帰ってこれない……」

「そう、そうなんだ。でも、いいんだ。いいんだよ。砂粒はカプセルに入れた。そのカプセルだけは燃えずに地上まで届くから」

「何てひどい話なの」とルチアは言った。「あなたの生みの親は、あんた自身は死んでしまっても、そのカプセルとやらさえあれば、それでいいって言うの？ その……砂粒を……」ルチアはつい、その馬鹿々々しい砂粒と言いつつになって、でもそれを取ってきたのをこの子がこんなにも誇りにしているものなんだから、悪く言うてはいけないという配慮が辛うじて働いて口を噤（つぶ）んだ。「その砂粒を取ってこさせるためだけに、あんたを利用して、あんた自身のことを見殺しにするって言うの？ それがあんたのお父さんやお母さんなの？ 実の子を……」

「いいんだ、ルチア、いいんだよ。お父さんたちも悲しくてたまらないんだ。それはぼくにはよくわかる。できればぼくが死なずに済むように、何とかしてやりたいて、一生懸命考えてくれたんだ。でも駄目だった。ぼくをここまで帰ってこさせるために、お父さんたちは途方もない苦勞をしてくれた。ぼくもそれに応えて、頑張（がんば）って、頑張（がんば）って、頑張（がんば）った。そして、やり遂げたんだ。カプセルを送り届けられる地点までは、このぶんならきつと行き着ける。それで、ぼくの仕事は、ぼくの任務は終わる」

「仕事、任務……」それはルチアにはよくわからない言葉だった。ルチアは狩りをして獲物を食べるが、それはただ生きるために必要なことをしているだけだ。詩を作って朗読会で読み上げることもあるけれど、それはただ自分が楽しみ、聞く者を楽しませるための行為でしかない。どちらも、仕事でも任務でもないことは明らかだった。「そんなことのために……」

「でも、大事なことなんだよ」と「彼」はルチアを穏やかにたしなめるような、おとなびた口調で言った。「あの星からぼくが運んできたこのほんのちょびつとの砂粒は、お父さんたちにとってはとても大切なものなんだ。それを取ってくるようにぼくは言いつかつた。それがぼくの任務だった。任務を果たす。それで、ぼくの生きたことの意味はあつたんだ。冷たい闇（やみ）のなかをただ飛んでいって、同じ暗闇のなかをただ飛んで戻ってくる——それだけの生涯だったけれど、それを生きたことの意味はあつた。ぼくはこの世に生まれて本当に良かったなあ。ぼくは本当に幸せだった」

冷たい宇宙空間を体の芯まで凍えつつ、孤独に飛びながらずっと考えつづけたこと、とことんまで考え抜いたことを、「彼」はただ静かな確信を籠（こ）めて語っているのだった。いちばん最初るときルチアに聞こえてきた「帰りたいよ……」「淋（さび）しいよ……」という、あの弱々しく心許（こもと）ない呟（つぶや）きとはまったく違う、迷いも揺らぎもない明るい声で。あれ以来、「彼」の体のコシ（こし）は増えつづけ、あちこち麻痺（まひ）していった、健康が損なわれてゆく一方だったけれど、長い孤独な飛行の間に「彼」の心はどんどん強くなっていったのだ。「彼」は本当に成長したのだとルチアは改めて考えた。「彼」はもうおとなだった。辛い苦しい体験を経て、ルチアには及びもつかないような成熟した深い諦（あきら）めの境地に至った、堂々とした一人前の鳥だった。

「あんたは、立派な鳥になったわねえ」とルチアは言った。

「そうかな、ふふっ……」と「彼」は照れたように少し笑った。「木原公園というところの上空を、きみと一緒に飛び回ったかったなあ。こんなふうにならずと広げっぱなしでいるのじゃなくて、この翼を上下に動かして、空気を打って、風に乗ったり、風に逆らったりして飛んでみたかったなあ」そんなことを言っただけで息を吐くときの「彼」は、しかしやっぱりまだいとけない子どものようだった。そして、ああ、疲れたよという小さな呟きとともに「彼」の声はぶつんと途切れた。こ

の頃はどうかすると **A** 頭がぼんやりしてしまう、まともにもが考えられなくなる時間が長くなっているのだと「彼」は言っていた。長い月日にわたって宇宙空間を渡ってくる間に、強い放射線をいっぱい浴びてしまったからねと言うのだが、「狩り」や「野ネズミ」が「彼」にわからないように、「放射線」が何なのかルチアにはわからない。

そもそも六十億キロというのがどれほどの距離なのか、ルチアには想像もつかなかった。木原公園は端から端まで一キロくらいだと聞いたことがある。その十倍が十キロ、百倍が百キロ、えーと……。何がわからないわ。でも、**B** それがとんでもない距離だということは間違いない。ほんとに凄いことをやったわねえ、あの小さな子が……。無邪気に遊んだり、友だちとふざけたりといったことを、あの子はいっさいしないまま、独りぼっちで飛びつづけ、その孤独のなかで魂を成熟させ、そして体の方はと言えば苛酷な条件のなかでぎりぎりまで力を振り絞ることを強いられ、成熟を通り越して急速に老いていた。「彼」がもう満身創痍であることをルチアはよく知っていた。

数週間後の深夜、「彼」の切迫した声^①が不意にルチアの心に飛びこんできた。そのときルチアは大きく翼を広げ、木原公園のうえをゆるやかに旋回^{せんかい}していた。

「ルチア、もうお別れだよ。どうか元気でね。今まで、ずっと一緒にいてくれて、どうも有難う！」

えっ、一緒に……わたしたちはずっとこんなに離れていたじゃない。お互いの姿を直接見たことすら、まだ一度もないじゃない。本当には一度も会ったことがないまま、お別れなんて……。

「待って、待って」と言いながら、ルチアは力のかぎりに翼を打ち、空の高みへ向かってどんどん上昇していった。上昇していけば「彼」に会えると思ったわけではない。けれどもただ、可能なかぎり少しでも「彼」に近づきたかった。距離を縮めたかった。

「さあ、飛んでゆけ！ カプセルを切り離したよ。これでもう大丈夫だ」と、力強く平静な声で「彼」は言った。今、太陽系創成の謎を解き明かす手がかりになるかもしれない貴重な試料をオサメタ^②そのカプセルと並行して、「彼」はなおも飛びつづけていた。というより **C**、地球に向かって落ちつづけていた。「彼」はもう目もほとんど見えなくなっていた。

「暗いなあ。ここは本当に暗くて、もう何も見えないや。数えきれないほど見えていたあの星々はいったどこへいったんだろう。そして、地球は……。もう一度、地球が見たいなあ」ゆっくりとゆっくりと、「彼」は体を回転させてみた。「あ、見えた。大きな大きな、真ん丸の星……。たっぷりした水をたたえて、真っ青な光に包まれて、しんと輝いている。ああ、地球……。何て美しい星なんだろう。あのどこかに、ルチア、きみもいるんだね……」

それはルチアに語りかけるというよりほとんど自分自身に向かっての呟きのようなものだったが、**D** 冷たくなってくる大気を貫いて上昇しつづけるルチアには、そのかすかな囁き声に乗った言葉が一語一語はっきりと聞き取れた。

「ああ、でもまた暗くなってきた。視界がぼやけて、掠れてゆく……真っ暗になってしまいう前に、この美しい光景を心に焼きつけておかなきゃ……」自分の視界が漆黒の闇に呑みこまれる寸前、「彼」はぱちりとまばたきして、その青い美しい星の姿を記憶のなかにくっきりと刻みこんだ。

そのとき、不思議なことが起きた。「彼」が必死の力を振り絞ってやってのけたその最後のまばたきは、ルチア自身のまばたきだった。ルチアにはそうしか思

えなかった。「彼」が最後に見た光景と、そのぼやけ具合や掠れ具合まで含めてまったく同一のものを、はっきりと、くっきりと、ルチアも見ただ。それまで「彼」から届いてくるのはただ声だけで、「彼」の瞳に映った光景がルチアの心に伝わってくることなど一度もなかったのに、この最後の最後の瞬間、「彼」の渾身^③のまばたきによって、たった一度だけ、「彼」の瞳が捉えたものをルチアも見ることができたのだ。

それは地球だった。「彼」がそこに帰りたいとあんなにも熱望していたこの小さな小さな、丸い星。そこにはもう色はなかった。実を言えば「彼」の目はもうほとんど駄目になっていて、色を見る力は残っていなかったから。壮麗^{そうれい}きわまる青の輝きを、「彼」はそこに、目ではなく心で見っていたのだ。その光景は鮮明でもなく、ぼんやりと掠れていた。全体を捉えきれてもおらず、三分の一ほどは闇に浸食されていた。ただし、そこに沢山の光のタテスジ^④が走っているのは、「彼」の視覚の衰えのせいではなかった。単に、後から後から流れて止まない「彼」の涙で滲^{にじ}んでいただけなのだ。

しかしそれは、すばらしい光景だった。「彼」とともにルチアもまた、大きな大きな、青く輝く美しい星をそこに見た。そのどこかに木原公園があり、ルチアが居心地の良い住まいにしているニレの太木がある。「彼」に向かって、こっちに向かって、必死に飛翔しつづけているルチア自身の姿も、その視界のなかに **E** 存在しているはずだった。ここなんだ、あの子はここに帰ってきたかったんだ、とルチアは思った。

「お帰り！」とルチアは大きな声で叫んでやろうとした。「頑張って頑張って、よく帰ってきたね！ 偉いね！ 偉い子だね！」と。でも、すっかり息が切れていて、ルチアにはもう、かすかな掠れ声さえ出すことはできなかった。

その最後のまばたきでもう、「彼」の力は尽きた。もう体のどこも動くところではなかったし、何も見えず何も聞こえなかった。大気の抵抗を受けて少し速度の鈍った「彼」を追い抜いてカプセルが先に立ち、一直線に落ちていった。大気の層はますます分厚く稠密^{ちゆうみつ}になり、「彼」の体がかっと熱くなりはじめた。

一方、ルチアは逆に凍えきって全身が痺^{しび}れ、もうこれ以上は羽ばたきを続ける力が残っていないという限界点に近づいていた。そもそも、このあたりまで昇ると空気があまりに薄いのでいくら翼を打ってもほとんど手応えがなく、もっと上昇するどころか、今いる高度より下がらないように体を支えているだけで精いっぱいなのだ。もうとくに「彼」の声は聞こえなくなっていたけれど、「彼」の体が炎に包まれはじめたのをルチアはまるで自分のことのようにまざまざと感じ取り、その激痛に呻^{うな}いた。最後に、本当に小さな、聞こえるか聞こえないかというほどの囁きがルチアの心に伝わってきた。

「ぼくの任務は終わったよ……」そう言い終えるか終えないかのうちに、とうとう持ちこたえきれなくなった「彼」の心臓が爆発した。「彼」の体は沢山の破片に分かれて飛散し、そのそれぞれが炎に包まれ、大小の火の玉となって地上に降りそそいだ。

ルチアは悲鳴を上げた。しかし、その瞬間悲鳴を上げたのはルチアだけではなかった。

(中略)

「彼」が孤独な炎と化して天空に散っていった後、ルチアは泣きながら、ほとんど墜落するようにして地上に降下していった。何だか、自分自身このまま地上に激突して死んでしまってもいいような自暴自棄の気分で、翼を動かそうという気にさえなれなかった。地上ほんの十数メートルのところまで来てようやく翼を広げ、風を掴^{つか}まえてそれに乗れ、池の水面に触れるか触れないかといったきわどいところを滑空して辛うじて墜落^{つらく}をかわし、そのまま飛んで対岸の木の下にふわりと降り

立った。

「ぼくの任務は終わったよ……」という「彼」の囁き声が耳元になまなましく蘇^{よみがえ}ってきて、ルチアはまたどっと泣き崩れた。だが、ひとしきり泣いた後ルチアは翼の先で涙をぬぐい、こんなことではいけないと自分に言い聞かせた。あの子は泣かなかったわ、とルチアは考えた。あの長い長い壮絶な旅の間中、「寒いよ……」と弱々しい声で訴えてきたときですら、ただの一度も泣かなかった。どんなにか淋しく、不安だったろうに。どんどん体が駄目になっていき、いつなんどきすべてがぱったり止まって、それきり動けなくなつて広大な宇宙空間にたった独り取り残されてしまうかもしれないのだから、どんなにか怖かったろうに。そして、最後には、あんなに帰り着きたかつた故郷の星がつい目と①の先というところまでようやく来て、それなのに、結局地上に生きて降り立つことはできないと知らされた。それでもあの子は泣かなかった。それどころかあたしの気持ちを斟酌^{しんしゃく}して、むしろ明るい元氣な声でそれを伝えてくれた。どんなにか悔しく、悲しかったろうに。「ぼくの生きたことの意味はあつた」と言つたわ。「本当に幸せだった」とも。

勇氣という言葉が浮かんできた。勇氣という言葉があることはもちろん知つていた、でも、その本当の意味を、あたしは今の今まで全然知らなかつたんだわ、とルチアは驚きとともに考えた。あの子が、あのすばらしい鳥があたしにくれた、大事な大事な贈りもの……。世を勘^さねて、さもしい妬^{ねた}みや卑^{いや}しい恨みを抱え、他人の振る舞いの揚げ足取りをしたり悪口を言つたりしながら暮らしている連中がこの世界にはいる。そういう連中も、自分では生きてゐるつもりでいる。でも、生きるというのは、ああいうことじゃないんだとルチアは改めて思った。真に生きるとは、真に十全に生きるとは、「ぼくの生きたことの意味はあつたよ」と明るい声でぽんと言ひ放てるということだ。その単純なことのために必要なのは、これまた単純なつた一つのもの、つまり勇氣だ。とうていそんなことを言えるような状況にあつたとは思えないあの子が、「本当に幸せだった」と言いきつた。それが勇氣だ。

あたしに残された生の時間はもうそんなに多くはないかもしれないけれど、残された歳月を勇氣をもって生きよう。孤独から救われる必要などないのだ。どこまでも孤独な魂として、あたしはあたしなりの生を全うしよう。そして、最後の最後という瞬間に「あたしの生きたことの意味はあつた」と言えるようになるう、あの子の、あの立派な鳥の尊い犠牲に報いるためにも――後から後から溢^{あふ}れ出していつまでも止まらない涙をぬぐいながら、ルチアは自分にそう言い聞かせた。

松浦寿輝『川の光外伝』より（一部、改変があります。）

問一 部 a d のカタカナを漢字に直しなさい。送り仮名がある場合はそれも書きなさい。また、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 A E に最も適する語を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ すぐ ウ たしかに エ とにかく オ むしろ カ だんだん

問三 1 に漢字一字を入れ、慣用句を完成させなさい。

問四 部 ①「切迫した声」とありますが、このときの「彼」の気持ちとして最も適するものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 病気がひどくなる一方なため、そのつらさをこらえて、何とか声をしぼりださなければと思う気持ち。

イ 木原公園の上空をルチアと一緒に飛び回ったが、それがかなうかどうかあせる気持ち。

ウ 自分の死期が迫っていることを悟り、その前にルチアに自分の気持ちを伝えておかなければと思う気持ち。

エ 頭がぼんやりしてしまふ時間が長くなってきているため、もうルチアと話せなくなるかもしれないという不安な気持ち。

問五 部 ②「力強く平静な声」とありますが、このときの「彼」の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

問六 部 ③「渾身の」について、同じ意味の表現を本文中から十六字で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ書きなさい。

問七 部 ④「あたしの気持ちを斟酌^{しんしゃく}して」について、次の問いに答えなさい。

(1) ここでの「斟酌する」の意味として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア うまく利用する。

イ 良くくみとる。

ウ 深読みすぎる。

エ 知らないふりをする。

(2) ここでの「あたしの気持ち」をわかりやすく自分の言葉で説明しなさい。

問八 部 ⑤「あの子」とありますが、実在のモデルがあります。その名前は何か、ひらがな四字で答えなさい。

問九 部 ⑥「立派な鳥の尊い犠牲」とありますが、「立派な鳥」のどのような生き方のか、わかりやすく説明しなさい。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

インターネット上の情報は、文字通り **A** 石混淆^{いんこう}です。不正確な情報や、ときにはわざとウソの情報を掲載^{けいさい}しているウェブサイトもたくさんあります。少し前のことですが、アメリカのある大学で、提出された課題レポートで、同じ間違いを書いた答案がたくさん見つかった、という事件がありました。

教授がその原因を調べたところ、間違えた学生はみな、「ウィキペディア」というウェブサイトに掲載されていた内容を写していたことがわかったのです。

B、ウィキペディアに書かれたアヤマった記述を信じ、それをレポートに書き込んでいた、というのです。

インターネット上の情報には、つねにこのような危険がともなうことも指摘しておきましょう。インターネットから情報を得る際には、信頼できる組織や個人が運営するウェブサイトかどうかをチェックした上で、ほかの情報とも照らし合わせ、その真偽^{しんぎ}を確かめる必要があるのです。ちなみに本書では、ウィキペディアに掲載された写真をいくつも紹介していますが、さまざまな検討をした上でそれらを選んでいきます。

C 報道機関が伝える情報にも、伝える情報が一面的であったり、ときには間違いの見つかったりするケースがあります。

D 報道媒体^{ほうどばたい}によっては、読者や視聴者の興味をひくため、できごとを誇張^{こちやう}したり、少しゆがめたりして報道することもあるでしょう。

その反対にインターネット上にも、速報性の点でも、できごとの背景や今度の予想など多面的な解説を加えているという点でも、優良な報道機関に匹敵^{ひてき}する良質な情報を提供しているウェブサイトやブログなどがたくさんあります。

E 一般的に言って、情報の信頼性という点では、報道機関が流す情報のほうが、インターネット上にあふれる多くの情報よりもはるかに信頼できること、はたしかです。

私たちとしては、インターネットの情報が、信頼できるものなのかどうか、自分で判断をしなければならぬ時代になりつつある、といえるでしょう。

さらに近年、アメリカなどで大きな問題となっているのが、新聞の休刊にともなうマスメディアの「調査報道」能力の低下^{②*}です。

アメリカでは現在、多くの人々が、インターネットなどの情報に頼り、新聞をあまり読まなくなりつつあります。そのため、多数の新聞社の経営状況が悪化し、過去五年半ほどの間に、二二紙もの地方新聞が休刊に追い込まれている、というのです。新聞記者の数も減っていて、二〇年前には六万人ほどいた記者が、現在では四万人ほどまでに減っています。

その結果、新聞の取材能力が低くなり、とくに地方の現状を報道するための取材活動がされにくくなっている、といわれています。これによって、報道のダイシヨウ^{ダイシヨウ}からはずれてしまった「報道空白域」が、アメリカの各地に出現するようになったこと、が指摘されています。

そこでは仮に、地域の政治家たちが、政治を自分たちに都合よく動かしたとしても、その状況を明らかにしたり、食い止めたりすることはむずかしくなります。たとえばカリフォルニア州のベルという小都市では、地元紙が一九九八年前後に休刊となりました。そのために、この地域の事件を報道する記者がいなくなってしまうのです。それを見ていた市の行政官^{ぎょうせい}（事務方の最高位の人物）は、当初は五〇〇万円前後だった自分の給料を、十数年かけてこっそりと、その一三倍近く

の約六四〇〇万円にまで引き上げました。これは大統領の給料の約二倍です。しかしここでは、行政や議会の幹部たちが、なれ合いによって政治を動かしていたため、こうした行動に歯止めがかかりませんでした。

最終的に、広域紙の『ロサンゼルス・タイムズ』が、話を聞きつけて報道したため、事件が明るみに出ました。しかしそれまでの一〇年以上の間、この状況は外部に知られず、歯止めもかからないままだったのです。

もしベルに、地元紙の新聞記者が常駐^{じょうちゆう}し、地域の現状を細かく報道していたならば、こうした事件は起きなかった、といわれています（『朝日新聞』二〇一一年一〇月二九日付朝刊）。

社会の中で的事件や問題点、課題などを見つけ出し、それを分析するという意味での調査報道能力に関して言えば、新聞は、人員の質量とも、さまざまなメディアの中で群を抜いています。その新聞が、インターネットなどとの競合の中で、休刊するという事態が広がっていくとどうなるか。ベルの事例は、そのことを私たちに考えさせます。

現在、新聞や調査報道、取材を中心に構成する「ルポルタージュ」などに対する人々の関心が、日本をはじめとする先進各国で低下している、といわれています。多くの人が、著名人のゴシップなどといったニュースには興味を示す一方で、社会の問題点や今後の課題などをテーマにした、考えさせられる内容の報道からは目をそむけがちだ、という指摘もあります。

③ そこでは人々が、私たちの社会の中でジャーナリズムが持つ意味合いを、忘れてしまったかのようです。しかし私たちが、自分たちの社会に関する報道に興味をなくしてしまえば、権力との緊張関係の中で、近代以降少しずつ地位を築いてきた報道機関の存在意義は薄れていくでしょう。それが進めば、私たちが獲得した、貴重な「社会の真実の姿に近づくための手段」を失うことにもつながりかねません。

私たちには、自分たちが生きるこの社会のことをきちんと知り、私たちにとってよりよい社会を築き上げていく責任があります。そのためには、④ 報道という社会の機能が持つ重要性を、再度認識することがとても大切になってくるのです。

眞淳平『人類の歴史を変えた8つのできごとⅡ』より（一部、改変があります。）

* マスメディア……新聞・雑誌・ラジオ・テレビ・インターネットなどの大量伝達手段。

* ルポルタージュ……新聞・雑誌・放送などによる現地からの報告。

* ゴシップ……うわさ話。

問一 部 a c の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直さない。

問二 A に適する、漢字一字を答えなさい。

問三 B E に最も適する語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ つまり ウ あるいは エ もちろん

問四 部 ① 「このような危険」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 「このような危険」とはどのようなことですか。文中の言葉を用いて四十字以内で答えなさい。(句読点・記号も字数に含みます。)
- (2) 「このような危険」をさけるために、私たちはどのようにすべきだと筆者は言っていますか。文中から三十五字以上四十五字以内で探し、最初と最後の五字を書きなさい。

問五 部 ② 「マスメディアの『調査報道』能力の低下」とありますが、これによってどのような事態が起こるといっていますか。その答えとして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア その地域が抱えている問題点などが表に出てこず、悪事が進行してしまうおそれがある。

イ 問題点を指摘する存在がないため、政治家ばかりが私腹をこやしてしまうことになる。

ウ 小さな都市の中で、人々が大切にしてきた習慣や仲間意識が失われる危険性がある。

エ 社会問題を解決する能力がおとろえ、政治が機能しなくなるという状況におちいる。

問六 部 ③ 「そこ」とありますが、これは私たちのどのような状態を指していますか。文中の言葉を用いて答えなさい。

問七 部 ④ 「報道という社会の機能」とありますが、報道とはどのようなものだと思いますか。文中から十六字で抜き出しなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

オノマトペは日本語で擬声語と訳します。これは、さらに擬音語と擬①語に分類されます。擬音語とは実際の音を模倣したことば、擬①語とは音を発しないものを音で表現したことばです。

A 向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し日のちひささよ 『生くる日に』 前田夕暮

B ぐぐと白き豚が一匹鼻さを地に押しあてて啼いてゐたりけり 同

ここで、「ゆらり」「②」がオノマトペです。

前田夕暮の最初の歌では、ヒマワリという大きくて明るい植物の姿態が詠われており、その存在感をあらわすのに「ゆらりと高し」とオノマトペを用いた表現が使われています。ヒマワリと③の遠近法など、今からみれば素朴なものです。こうしたおおらかな明るいすっきりとした表現が、ひとびとに広く受け入れられるところとなりました。ひとことではいえず、④姿のいい一首といえましょうか。

それに対して、同じ夕暮の二首目は、同じように生きものを歌いながら険しいものになっています。「②」というオノマトペは、豚のぐぐもるような鳴き声を表現することですが、その豚は「鼻さを地に押しあてて」いるわけです。さきのヒマワリとは対照的に、生きることの苦を端的にあらわした暗い表現でありましょう。結句の「啼いてゐたりけり」の字余りも、この暗さに符合して一首を重くしています。

坂井修一『ここからはじめる短歌入門』より(一部、改変があります。)

問一 ① に適する漢字一字を答えなさい。

問二 部「金の油」とは何の例えですか。簡潔に答えなさい。

問三 ② に適する言葉を、Bの短歌から抜き出して答えなさい。

問四 ③ に適する語を、Aの短歌から漢字一字で抜き出して答えなさい。

問五 ④ に適する語句を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 色彩の豊かさにあふれた イ 植物の小さな命を描いた

ウ 夏の暑さを表した エ 生命感に満ちた

四 次の――部を正しい敬語に直しなさい。

- ① 「その件につきましては、担当者に直接うかがってください。」
- ② 「お客様は、あちらにありますか。」
- ③ 「この学校を受験することを、あなたは自分で決めましたか。」「はい。この学校を受験することは、自分で考えてから両親にも相談なさいました。」
- ④ 「その件については、兄もご存じであると聞いています。」
- ⑤ 「先生は、母にお目にかかったことがあるそうです。」

